

ルドルフ・ディットリヒ物語

出版の思い出



平澤博子氏著作「ルドルフ・ディットリヒ」の表紙

市川二中同窓会

1 期生 桑村 益夫

「ルドルフ・ディットリヒ物語」出版の思い出

桑村 益夫



著名な音楽家ブルックナーの愛弟子である、オーストリア人の音楽家ルドルフ・ディットリヒは明治政府の要請により 1888 年から 6 年間、東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部の前身）の教授を勤めました。それ以前にも何名かの音楽家が諸外国から招聘されましたが、当時の国の西洋音楽から学びたいものは軍楽隊の養成でしたので、作曲家でありパイプオルガンやヴァイオリンも演奏できる、オールマイティーな音楽家来日は初めてのことでした。ルドルフ・ディットリヒは日本の西洋音楽教育の父とも称せられるべき立派な音楽家（資料 1）です。

2014 年の中頃、私のトランペットの師匠、築地徹氏（東京芸大卒、ウィーン・トランペット研究会代表）のレッスン室でふと手にした日本とオーストリアの文化交流の歴史を記した、オーストリア大使館発行の「オーストリア・日本」と題する小冊子の”Tekona Marsch(手児奈マーチ)”と題したピアノ譜に目を奪われました。年号が万葉集に由来する「令和」に代わり、改めて万葉集が注目されるようになりましたが、「手児奈(てこな)」は千葉県市川市真間に伝わる伝説上の美女の名前で、万葉集に山部赤人や高橋虫麿呂が彼女の悲話を詠んだ和歌が載っています。

私は東京の下町の生まれですが、戦火を避けて転校した真間小学校の隣りに「手児奈」を祀る「手児奈霊神堂」があり、手児奈の伝説は良く聞かされていきましたので、大いに興味をそそられ小冊子を読み、このピアノ曲を作曲したルドルフ・ディットリの存在を始めて知りました。私は「手児奈マーチ」を是非とも蘇演させたいと考え、築地徹氏にウィーンの図書館でピアノ譜を探し出して頂き（資料 2）、私の高校の先輩で作曲家兼指揮者、早川正昭氏（広島大学名誉教授）（資料 3）に無償で管弦楽及び吹奏楽に編曲して頂きました。

早川先輩は市川市の出身で、市川に縁のある手児奈の名を冠したこのピアノ曲に親近感を覚えられてのことでした。私は上記と並行して、ルドルフ・ディットリヒについて詳しく知りたいと調べた結果、24 年間もウィーンに滞

在し音楽全般を研究された平澤博子氏にお会いし、同氏がウィーン国立大学で博士号を取得された際の論文の内容を、日本へ帰国後「ルドルフ・ディットリヒ物語」と題して、「音楽鑑賞教育」という教育雑誌に連載された全文を頂戴することが出来ました。

私はこれを通読して初めてディットリヒの日本の西洋音楽の父とも讃えられるべき偉業に接し、一人でも多くの音楽愛好家にその存在を知って欲しいと考え、全く無謀にも「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」の立ち上げを提案した次第です。出版には全くの門外漢である私は、音楽仲間で出版業に精通する故山岸修氏の絶大な支援を仰ぐと同時に、学究肌の平澤博士に既刊の内容の全面的な推敲作業を進めて頂きました。

出版の為の資金を確保するための顕彰出版会の立ち上げに当たっては（資料4）、澤和樹東京藝術大学学長始め、津堅直弘日本トランペット協会会長他の音楽家の方々、及びフーベルト・ハイッス駐日オーストリア大使、近藤誠一日壇文化協会会長、大久保博市川市市長（いずれも当時）、飯島延浩山崎製パン社長、伊藤賢二伊藤楽器会長、早川正昭（広島大学名誉教授）、岩井晴郎（元市川市議会議長）、中津攸子（作家）、高鍋誠太郎（市川市立第二中学校長）、以上順不同、敬称略、他の総勢36名の方々に顕彰出版の会の発起人にご就任頂くと共に、多額のご賛助を頂戴しました。上記の方々のご尊名を記載した、「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」の趣意書と賛助申込書を兼ねたリーフレットを、2016年秋以降あらゆる機会を捉えて、私の小、中、高、大学時代の友人、音楽仲間他多くの方々に配り、一口二千元以上の賛助を要請しました。

その結果、2019年6月末現在で、市川二中同窓生40名を含め、290余名の方から総額150万円を超える賛助金が寄せられ、2019年11月に、日本・オーストリア修交150周年を記念して出版に漕ぎつけ（資料5）、当時のフーベルト・ハイッスオーストリア大使の格別のご厚意により、オーストリア大使館で市川二中同窓会役員を含む、多数の賛助者をお招きし盛大な出版記念会を開催することができた次第です。出版記念会には音楽好きの大使がウィーンで知り合った日本人の音楽家の方々が名演奏を披露され、我が師匠の築地徹

氏も、ご自身が発掘されトランペットの独奏曲に編曲した「手児奈マーチ」を演奏されました。

「手児奈マーチ」は、1894年にルドルフ・ディットリヒがオーストリアに帰国後程なくウィーンで初演され、初めて東洋の音楽に接して熱狂した聴衆により4回もアンコールが繰り返されたと、前記の小冊子に書かれています。日本では、出版に先立つ2015年6月、早川正昭氏の編曲、斎藤純一郎氏の指揮により、私が所属するリタイア世代のオーケストラ、「村上正治記念ちばマスターズオーケストラ」により蘇演が果たされ（資料6）、編曲譜を当時の市川市長大久保博氏に寄贈致しました。この模様は産経新聞（資料4）、千葉日報（資料5）に取り上げられました。

ルドルフ・ディットリヒは1888年、夫人と共に来日して三年後に夫人が急逝されましたが、ルドルフ・ディットリヒが明治憲法発布記念の歌等、非常に立派な仕事をしたので、更に三年任期が延長されました。当時まだ30歳であったルドルフ・ディットリヒは三味線のお師匠さんと推測される日本女性の森菊と結ばれ、男児を授かりその男児の長男が俳優の故根上淳で、夫人は故ペギー葉山さんです。「手児奈マーチ」の初演当日お出で下さった、ペギー葉山さんからその日の晩に、「大変素晴らしい演奏会を実現して下さい誠に有難うございました。根上淳の写真をハンドバッグに忍ばせて聴かせて頂きました。恐らく根上は今頃天国で、おじいちゃまと美味しいお酒を酌み交わしていることでしょう。」と、情感の籠った丁寧なメールを頂戴しました。

Score

手児奈・マーチ

Marsch

Rudolf Ditttrich

Piccolo

2 Flute

2 Oboe

2 Clarinet in B^b

2 Bassoon

「手児奈マーチ」はルドルフ・ディットリヒが日本人妻・森菊から習ったであろう日本の俗謡のメロディーで構成されており、ウィーンで初演された際に、そのメロ

ーの珍しさから四回もアンコールが繰り返されたことが納得できます。

ルドルフ・ディットリヒは帰国後「日本楽譜」と題して多くの邦楽を紹介し、

それらがプッチーニのオペラ「蝶々夫人」等にも引用されており、ルドルフ・ディットリヒは邦楽の世界への紹介者と称すべき音楽家です。

2019年が日墺友好150周年に当たることが、オーストリアでも重視されているようで、私が元ウィーンフィルのトロンボーン奏者、カール・ヤイトラー氏に寄贈した、「手児奈マーチ」の吹奏楽版が、その年のザルツブルグ音楽祭で演奏されたことは望外の喜びです。

ルドルフ・ディットリヒのことは、2017年10月20日付けの「天声人語」に論説委員中山季広氏の軽妙な筆致により（資料7）、手児奈霊神堂と共に紹介されました。ご覧になられた方もいらっしゃると思います。繰り返しとなり恐縮ですが、出版には全く無縁の私が無謀にも取り組んだ出版事業が、かくも多くの方々のご支援、並びに平澤博子博士、故山岸修氏のご尽力により、一定の成果を上げることが出来ましたことを、改めて心より感謝し厚く御礼申し上げます。「ルドルフ・ディットリヒ物語」は、序文を書いて下さった当時の東京藝術大学澤和樹学長の推薦状を添えて（資料8）、全国の主要な音楽大学20校に寄贈し、市川市にも20冊を寄贈しました。

私は顕彰出版の会の事業を進めてきた過程で、その偉大な功績にも拘らず、ルドルフ・ディットリヒの事績や存在そのものが、日本はもとよりオーストリアの音楽家も含め全くと言って良い程知られて居ないことに驚かされました。「ルドルフ・ディットリヒ物語」（資料9）を一人でも多くの方々にお読みいただき、日墺友好促進の一助になること心より念願致しております。私は、1950年高校一年の時に出会い、過去73年間に亘り私の人生を誠に豊かにしてくれているトランペットを、多くの友人に支えて頂きながら今暫く吹き続けたいと念願しております。なお、「手児奈マーチ」の吹奏楽版は、市川二中吹奏楽部が数年前の同窓会総会で本邦初演を果たした事を申し添え、擱筆させていただきます。

(2023年11月記)

文化

1888年、設立間もない東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)に、楽都・ウィーンから二人の教師がやってきた。大男で熱血漢だったというルドルフ・ディットリヒ(61〜1919年)。日本の西洋音楽の礎を築いた人物だが、日本だけでなく故国でもほとんど忘れられた存在だ。私は彼の研究に取り組み、縁が重なり伝記まで書いた。

73年、ウィーンに渡った私は十数年間ピアノ講師などをした後、音楽学を学んだ。博士課程でディットリヒ研究を始めたのは安易な気持ちからだった。日本と往來ができる私は、資料集めに苦勞はないと思ったのだ。

だが現地の公文書館に行くと、関連資料は埋もれていた。掃除機でホコリを吸わなきゃいけないほどの発掘作業。司書からは「彼の死後、資料を開けたのはあなたが初めてだろう」と言われる。教授からも「ディットリヒ研究者は世界であなた一人だ」と励まされた。現在のポランドで生

西洋音楽導いた熱血教師

◇明治中期に來日したR・ディットリヒ 波乱の生涯を伝記に◇ 平沢 博子

まれた彼は、ウィーン楽友協会音楽院で後期ロマン派の作曲家アルクオナに師事した。バイオリンを弾き、オルガンではコンクールで1位も獲得。音楽院校長のヨーゼフ・ヘルメスベルガー1世の推薦で日本に渡った。日本から戻った後は宮廷オルガニストなどの要職に就いている。

ディットリヒの指導は熱がもっていた。不勉強な者は教室からつまみ出され、テスト答案は赤インクで細かく訂正を入れる。自紙が目立つ生徒には「もつとできたはずなのに」と奮起を促した。現在の教育実習のような演習もさせたという。

人生は波乱に満ちていた。来日2年後、歌手だった妻のペリーネを失う。しばらく泣き暮らし



根上淳さんに提供いただいたディットリヒの肖像写真

仕事も手につかなかったという。帰国後もバイオリニストの幸田延ら日本から来た留学生に会うと、「薙は大丈夫か」と心配けに問うたそうだ。

彼の教えとして重要だったのが、自国の音楽と基礎教育を大切にすること。彼は日本の音楽にも興味を持ち、森菊という女性に三味線を習った。2人は恋仲になり、もうけた子供がバイオリニストの森久。その長男が俳優の根上淳さんだ。

ディットリヒは6年の日本滞在を終え、母子を残し帰国した。子供が成人するまで毎年送金を続けたといい、根上さんも「そつとたど証言してくれ。根上さんはほかにも協力してくれ、ディットリヒがたどたどしい片仮名で書いた手紙や、写真も提供いただいた。2005年に根上さんが亡くなった後は、私がディットリヒ一家の墓に分骨させてもらった。

ディットリヒは邦楽を基にした曲を作り、ウィーンでも楽譜を出版している。中でも評判を呼んだのがピアノ曲「テコチ・マチチだ。千葉県市川市には「手虎祭」という悲運の美女伝説が残る。伝説との関連は不明だが、同市のアマチエ音楽家の桑村益夫さんが曲に注目し、管弦楽版の編曲を委嘱し初演された。

桑村さんは16年に「ルドルフ・ディットリヒ頭

彫出版の会」を設立。私に伝記執筆の依頼が舞い込んだ。1997年に帰国後、専門誌「音楽鑑賞教育」に成果を連載したが、本を書くとは思ってもみなかった。

根上さんの妻が歌手のペギー葉山さんも伝記を心待ちにされていた。2017年に亡くなる1週間前にも「またなの？」と電話をもらった。生前に渡すことはできなかったが、19年に「ルドルフ・ディットリヒ物語(論創社)を刊行した。今後、研究を深める人が出てほしい。映画やドラマにさわしい人物だとも思っている。(ひろさわ・ひろこ)音楽学者)

(資料2) ウィーンの図書館でピアノの譜面を入手 そして 市川で演奏

平成27年(2015年)1月15日 木曜日

産 経 新 聞

千葉



千葉総局

〒260-0013
千葉市中央区中央
4-17-3

☎ 043-225-2171
FAX 043-226-1782
chiba@sankei.co.jp

広告 043-202-8600

購読申し込み
0120-70-3034

配達・集金
0120-34-4646

紙面・記事
03-3275-8864

Web

http://www.sankei.com/
region/region.html

あすのこよみ

(16日)
旧11月26日
《赤口》



月齢…… 25.1
日出…… 6:46
日入…… 16:47
月出…… 2:05
月入…… 12:50
満潮…… { 2:18
 { 12:36
干潮…… { 7:04
 { 20:13
若潮……(千葉)

真間の伝説の美女をモチーフ「手児奈・マーチ」

明治時代に来日したオーストリアの音楽家ルドルフ・ディットリッヒが、古代に真間(市川市)に住んでいたと伝えられる美女をモチーフにした「手児奈・マーチ」を作曲し、約100年前のその楽譜がウィーンの国立図書館に保存されていることが分かった。同市在住の市川交響楽団協会理事、桑村益夫さん(80)が知人を通して楽譜を入手し、演奏会を企画している。

ディットリッヒは明治政府に招かれて1888年に来日。上野音楽学校(現東京芸術大学)の教授を務めた。6年後に帰国するまで、和楽に深い関心を持ち、三味線の師匠とも親しかったと伝えられる。

桑村さんは昨夏、日本とオーストリアの交流史を記した本を読んだ。ディットリッヒが帰国後、「手児奈・マーチ」を作曲。コンサートを開いたとの記述があった。和楽をイメージした旋律が大好評でアンコールに呼ばれて4度演奏したという。

手児奈は伝説の美女だ。7世紀から8世紀初頭の人物と推定される。自分をめぐって

古楽譜 ウィーンで入手

男たちが争うのをはかなみ、真間の入り江で自殺したと伝えられる。万葉集にも登場する。

桑村さんは「手児奈・マーチ」の楽譜をなんとか入手したいと思いつき、同国に留学経験のある知人の音楽家、築地徹さん(43)に東京都杉並区に頼んだ。

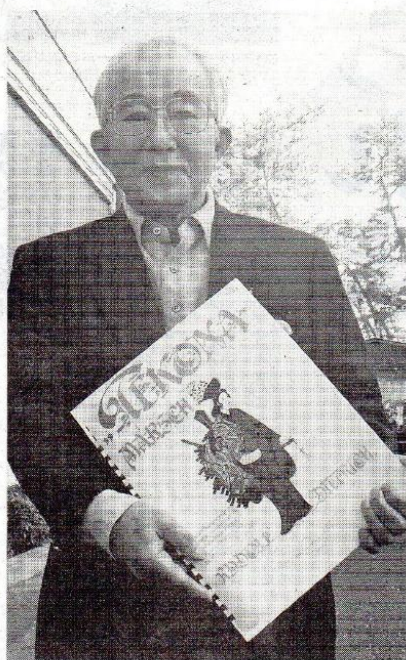
築地さんは昨年11月、ウィーンを訪れ、仕事の合間に音楽関連店などを回ったが見つからず、留学時代の友人に相談したところ、国立図書館が膨大な量の古い楽譜を保存していることを教わり、楽譜を探し出してコピーして持ち帰った。表紙には、日本の中世の装束をまとった若い女性が描かれていた。

桑村さんは「図書館に眠っ

今夏にも市川で演奏会

ていた楽譜を手にしたときは感慨深かった。約100年前の楽譜とみられるが、保存状態はよく、表紙の女性は色鮮やかだった」と振り返る。

楽譜を手にした桑村さんは「ぜひオーケストラで演奏したい」と、市川出身の作曲家、早川正昭さん(81)に水戸市にオーケストラ用の編曲を頼んだ。早川さんは快諾し、今夏にも市川で演奏会が開かれそうだ。桑村さんは「こんなに早く楽譜を入手できるとは思わなかった。運命的なものを感じる。ディットリッヒがなぜ手児奈に関心を持ったかは謎だが、明治時代に俗謡を聴いてイメージを膨らませ作曲したようだ。演奏会を開いて現代によみがえらせたい」と意気込んでいる。



ウィーンで探し出した「手児奈・マーチ」の楽譜(コピー)を手にする桑村益夫さん。演奏会を企画している＝市川市(塩塚保撮影)

ルドルフ・ディットリッヒ オーストリアの音楽家。パイプオルガンとバイオリンの演奏に優れ、上野音楽学校でウィーン音楽を指導した。音楽理論家で日本の小学唱歌集作成にも協力した。「第二の故郷」日本を愛したと伝えられる。

(資料3)「手児奈マーチ」を管弦楽に編曲された早川正昭氏の言葉

日本政府の要請で来日した、オーストリアの作曲家兼音楽教育者である東京音楽学校(現東京芸術大学)教授のルドルフ・ディットリッヒ氏(1861~1919)は、1888年から6年間日本に滞在し、今日の日本の洋楽の基礎を築く等、多大な功績を残して帰国した。

彼は、その時の経験をもとに、日本の旋律を用いた情緒豊かな多くの作品を書いている。1894年に「日本楽譜」というタイトルで、彼のピアノ独奏曲6曲がライプツィヒのブライトコップフ社から出版され、1895年には第二集として10曲が出版された。この楽譜は、その中の一曲「手児奈・マーチ」をオーケストラで演奏出来るように編曲したものである。

ルドルフ・ディットリッヒ氏が特に旅行して各地の日本民謡を収集した、という記録はないが、三味線を習ったりした位なので、西洋にはない日本の独特な旋律に魅了されたのであろう。

「手児奈・マーチ」には「猫じゃ猫じゃ(蝶々とんぼ)」「野毛の山」「浦島」「因州因幡」「トリアン」の5曲が集められており、今でも耳にすることのある旋律が出て来る。

今の日本人には一寸異質に聞こえる所も有るかもしれないが、それまでには、日本の旋律に本格的な西洋的和声をつけた例は殆ど無く、ディットリッヒ氏の優れた感覚と技術の高さがうかがわれる。ウィーンでのオーケストラによる演奏では、「日本の行進曲、本物の日本のモチーフによる行進曲」とささやきが人々に伝わるなど大好評で、オーストリアの新聞に「彼はその曲(手児奈・マーチ)を4回もアンコールしなければならなかった」などと書かれたそうである。

この編曲は、ウィーンの国立図書館に保存してある楽譜をコピーして帰国した、オーストリアに留学経験のあるトランペット奏者築地徹氏から、彼を師と仰ぐ市川在住の桑村益夫氏が借り受けたものが基になっている。その上に、在日オーストリア大使館が配付している資料「オーストリア・日本」に載っていた、当時出版された楽譜の一部を参照して、中編成のオーケストラで演奏出来るようにした。

しかし、単にピアノ曲を編曲したのではなく、ディットリッヒ氏の管弦楽編曲をなるべく想定して再現している。彼が書いた旋律・和声・バス・強弱は全く変更していないが、元唄を知る者としてフレージングの関係から、6小節の長いクレッシェンド(次第に大きく演奏すること)の開始を2小節遅らせ、4小節とした所が一箇所だけある。初演時の編成がわからないので、この編曲では、日本初演を担当する予定の「村上正治記念ちばマスターズオーケストラ」の常時の編成を主体として、少しメンバーを増員した場合でも演奏できるようにしてある。

「手児奈」に関係のある旋律も話もピアノの楽譜からは何もうかがえないが、表紙に「すべて、オリジナルな日本の芸者唄を集めてディットリッヒが構成した。」とあり「テコーナ」と呼ばれるのを避けるためであろう、Teのeの上にアクセントが書かれている。彼が手児奈の物語を聞いて感銘を受けた事は想像出来るし、他の曲「祭り囃子」の元唄の歌詞には「Mama no Tekonaka Tekomae ga」の部分があり、the beautiful Tekona from Mamaと英語(独語にも)に訳したり、TekonaとTekomaeは言葉遊び(地口合わせ)であると説明している程「手児奈」には詳しい。しかし私は、日本の代表的な固有名詞として、「手児奈」を彼がこの曲の題名に選んだのだろうと思う。いずれにせよ、19世紀に、文化の都と言われるウィーンで、我ら市川が誇る伝説の美女「手児奈」の名前が轟き響いたことは、大変嬉しい事である。

[注意] ピアノ譜では、最初の繰り返し以外は延べで書かれていたので、ダ・カーポ後も、繰り返し有りて演奏する方が、作曲者の意図に近いと思われる。演奏時間約3分。(Timpaniパートの括弧は、Timpaniが2個しか無い場合に休む箇所又は代用する音を示す。)

2015年2月 早川正昭 記

R・ディットリヒの評伝出版

明治時代に来日し、真間(市川市)の伝説の美女をモチーフにして「手児奈マーチ」を作曲したオーストリアの音楽家、ルドルフ・ディットリヒの劇的な人生を記した本格的評伝が出版された。市川市民らが出版に向け、尽力した。

明治政府に招かれ

市川市在住の村上正治記念ちばマスターズ・オーケストラ顧問、桑村益夫さんが顕彰出版の会の立ち上げを提案。平成28年からリーフレットを配って協力を呼びかけたところ、300人を超す人々から賛助金が寄せられた。また、編集に詳しい山岸修さんとともにウィーン留学経験のある平澤博子さんに執筆を依頼し、「ルドルフ・ディッ

ルドルフ・ディットリヒ物語



出版された「ルドルフ・ディットリヒ物語」

「手児奈マーチ」で日本紹介

リヒ物語」(論創社)を出版することができた。

今年8日、東京都の駐日オーストリア大使公邸で出版祝賀会

市川市民ら顕彰に尽力

が開催された。フーベルト・ハイツス大使があいさつし、平澤さんが講演を行った。会場では手児奈マーチが演奏され、好評だった。
ディットリヒは明治政府に招かれ、来日。東京音楽学校(現



出版祝賀会では手児奈マーチが演奏された
＝東京都内の駐日オーストリア大使公邸
(塩塚保撮影)



ルドルフ・ディットリヒ

1861〜1919年。オーストリアの音楽家。明治政府に招かれ、明治21年に来日。東京音楽学校で洋楽を指導するとともに音楽会で演奏した。日本の民謡や小唄などにも関心を示した。帰国後、オルガン奏者などとして活躍した。

平澤さんは「ディットリヒは、いかつい大男でした。日本にいた6年間、たくさんの業績を残した。西洋音楽の導入期にその神髄を日本に伝えたので」と語る。

日本で多くの業績

帰国後、手児奈マーチを作曲し、コンサートで演奏している。手児奈は古代の伝説の美女だ。自分をめぐって男たちが争うのをはかなみ、命を絶つたと伝えられる。

桑村さんは平成26年、日本とオーストリアの文化交流史を読み、同マーチの存在を知った。親しいトランペット奏者の築地徹さんがウィーンで古い楽譜を探し出し、コピーして持ち帰った。この楽譜をもとにして翌27年、同マスターズ・オーケストラが市川市で演奏した。

桑村さんは「多くの人たちにディットリヒの偉業と存在を知ってほしい。この本が日本とオーストリアの友好促進の一助になれば」と願っている。

(資料5) 「ルドルフ・ディットリヒ物語」出版を記念して祝賀会を開催

オーストリア作曲家評伝 国内初出版



右から「ルドルフディットリヒ物語」の著者・平澤博子氏、当時のオーストリア駐日大使フーベルト・ハイッス氏、ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版会の事務局長だった私・桑村益夫、出版の技術面で貢献していただいた山岸修氏

市川の桑村さん 刊行に奔走

明治時代に来日したオーストリアの作曲家、ルドルフ・ディットリヒ(1861-1919)の国内初の評伝「ルドルフ・ディットリヒ物語」(論創社)が出版され、祝賀会が東京都内のオーストリア大使館で開かれた。ディットリヒは市川市真間伝わる伝説の美女「手児奈(てこな)」をモチーフにしたマーチを作曲した人物。評伝は日奥友好150周年の記念として刊行された。

大使館で祝賀会

ア大使館で開かれた。ディットリヒは市川市真間に伝わる伝説の美女「手児奈(てこな)」をモチーフにしたマーチを作曲した人物。評伝は日奥友好150周年の記念として刊行された。

ディットリヒは明治21(1888)年、政府の招きで来日し、東京音楽学校(現・東京芸術大)の教授を6年務めた。多くの音楽家を育成指導し、日本における西洋近代音楽教育の父とも呼ばれる。「手児奈マーチ」の由来は定かではないが、帰国後まもなく作曲したらしい。

「手児奈マーチ」の存在は長く忘れられてきたが、同市を拠点に活動するオーケストラの顧問、桑村益夫さん(85)が、偶然手に取ったオーストリア関連の冊子でマーチの存在を知り、同国ウィーンに眠っていた楽譜を入手。2015年には同オーケストラが同市のコンサートで演奏し、市ゆかりの曲が1世紀以上の時を

友好150周年を記念

経て市内に響いた。桑村さんは、ディットリヒがあまり知られていないことから評伝を刊行しようと資金集めに奔走。長年ディットリヒ研究に携わってきた平沢博子さん(72)が原稿を執筆し、3年をかけて日奥友好の節目の年に出版にこぎ着けた。

オーストリア大使館で開催された出版祝賀会では、フーベルト・ハイッス大使が「今年には両国の外交関係が始まり150年という特別な年。文化、音楽の関係が始まった年でもあり、ディットリヒは重要な人物の一人」とあいさつ。併せてコンサートもあり、「手児奈マーチ」を始めとした和の旋律が大使館に響いた。

平沢さんは「近代黎明期の日本に西洋音楽の神髄を伝えた音楽家。評伝が両国文化のさらなる交流の一助となれば」と期待。桑村さんは「偶然冊子を見たことから始まり、さまざま人の助けを経て刊行に至った。一人でも多くの音楽愛好者にディットリヒの存在を知ってほしい」と話した。

「手見奈マーチ」

オーストリアの作曲家、ルドルフ・デイトリッヒ(1861-1919)作曲の「手見奈マーチ」が、「真間の手見奈伝説」で知られる市川市で開かれた村上正治記念ちばマスターズオケストラ創立10周年記念コンサートで初めて演奏された。同楽団関係者がマーチの存在を偶然知り、知人らの協力を得てウィーン国立図書館に眠っていた楽譜のコピーを入手。約120年の歳月を経て、ゆかりの旋律が市民の耳に届いた。



市川の楽団顧問 ウィーンに眠る楽譜入手

村上正治記念ちばマスターズオケストラのコンサートで「手見奈マーチ」の編曲譜の寄贈を受ける大久保市長(右)と市川市の行徳文化ホールと

伝説の地で初演奏

デイトリッヒは1861年、明治政府に招聘されて来日。東京音楽学校(現・東京音楽大学)の教授を6年間務め、帰国後日本の音楽を西欧に紹介した。「手見奈マーチ」は帰国後まもなく作曲したとされる。同市を拠点とする楽団の桑村益夫顧問(80)は昨春秋、偶然手に取ったオーストリア関連の雑誌で「手見奈マーチ」の存在を知った。「市川に縁のある曲だから、何とかして楽譜を手に入れたい」と市を通じてオーストリア大使館に手紙を書いた。知人に頼んで捜索。ウィーン国立図書館に所蔵されていることを突き止めた。楽譜はピアノ用に書かれていたが、桑村さんの高校の先輩で同市出身の作曲家、早川正昭さんかオケストラ用に編曲した。手見奈マーチには「猫じゃね

こじゃ」「野毛の山」など代表的な芸者音楽がら曲使われており、桑村さんは「誰が聴いても親しみが湧いてくる曲」と話す。コンサートには同市の大久保博市長も出席。演奏に先立ち、同楽団を通して市に編曲譜が寄贈された。大久保市長は「楽譜は大切に保管して、市民に展示したい」と述べた。手見奈伝説は「手見奈」という名前の美女が、男たちの争いを苦にして自ら命を絶たした悲話。見奈を供養するために建てられた「手見奈霊堂」が同市真間にあり、現在は安産や子育ての神様として信仰を集めている。なせマーチに手見奈の名を冠したかは定かではないが、デイトリッヒはオーストリアから連れてきた夫人が任期半ばで急逝。のちに三味線の名手だった森菊と結ばれ、子どもをもつたことから、桑村さんは「奥さんが身ごもった時に安産を願って作ったのではないかとマーチ誕生の由来を推測している。



県 西

皆さまからの情報をお待ちしております。
E-mail c-nippo@chibanippo.co.jp

TEL FAX
047(471)9958
習志野市

2017.10.20 朝日新聞 天声人語

天声人語

20世紀初め、ウィーンで「手
見^て奈^まーチ」という行進曲が評
判を呼んだ。手見奈は万葉集に
も詠まれた伝説の美女。自分を
めぐって争う男たちを悲しみ、
いまの千葉県市川市にあった入

り江に身を投げたとされる▼作曲者はの
ちにウィーン音楽界で重きをなすルドル
フ・ティットリヒ。明治の中葉、東京音
楽学校（現東京芸大）で6年、音楽を教
えた▼「安産も子育ての神様として手見
奈を知ったのでしよう。日本女性との間
に男児をもち、離別の際は預っていく
母子の行く末を案じていました」。推測
するのは地元^の市川市でティットリヒの
顕彰を始めた桑村益夫さん(82)。ウィ
ーンに埋もれていた楽譜を取り寄せ、2年
前には所属する楽団で披露した。いまは
評伝刊行の資金集めに奔走する▼いわゆ
るお雇い外国人の中で知名度こそ高くは
ないが、貢献度は高い。本場の作曲、指
揮、歌唱、演奏を体系的に教え、應鳴館
で音楽会を開いた。明治憲法の公布を祝
う歌を作り、帝国議会開設の記念曲も奏
でている▼授業は厳しかったが、返却す
る答案には「日土^非」と当て字の印を
押した。遊び心もあつたらしい。帰国後
は日本で集めた旋律をもとに曲作りに励
んだ。「手見奈」も自ら指揮したといら
▼市川市での初演を録音で聴いてみた。
リズムは全篇ウィーン風ながら、民謡や
小唄からとり入れた旋律が耳にすつとな
じむ。万葉集から應鳴館へ、帝国議会
からウィーン^の音楽堂へ。目を閉じて
時空を旅する感覚をしばし満喫した。

2017・10・20

2017年10月20日 朝日新聞・天声人語：桑村さんがディットリヒについて
顕彰を始めたことが記されている



TOKYO GEIDAI

(資料8) 澤和樹東京芸大大学長の推薦状

2019年も間もなく終わりを迎えようとしていますが、如何お過ごしでしょうか？
本年は日本とオーストリアの国交樹立 150 周年であり、日本の西洋音楽教育の父とも言うべきルドルフ・ディットリヒ没後 100 年にあたります。この記念すべき年に、
長年ウィーンでディットリヒ研究に携わってこられた音楽学者の平澤博子博士が「ルドルフ・ディットリヒ物語」を上梓されました。

私自身も巻頭言に書かせていただいた通り、創成期の東京音楽学校に、アントン・ブルックナーの薫陶を受け、フリッツ・クライスラーの同門として学ぶという当時のヨーロッパでも最高クラスの教育を受けて来たディットリヒが 6 年間に亘って日本の西洋音楽教育の礎を築いた事は、日本の音楽芸術のその後の発展を語る上で極めて大きな存在であったと思います。

平澤博子博士と、この本の出版に並々ならぬ情熱を注いだ「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」事務局長の桑村益夫氏より、日本の音楽教育機関の指導者、学生の皆様にルドルフ・ディットリヒの偉業と人となりを知って頂くために寄贈の申し出がありました。

貴学の図書館等に収蔵頂ければ幸いです。

2019 年師走 東京藝術大学長

澤和樹

週刊読書人

読物文化

週刊読書人

2020年(令和2年)1月31日(金曜日)

平澤 博子著

ルドルフ・ディットリヒ物語 ウィーンから日本へ 近代音楽の道を拓いた

「周囲を威圧するほどの巨体の持ち主であったディットリヒは、はばかりもなく粗野な方で話すこともあったと言われています。が、いったんオルガンに向かったディットリヒは別人のごとく、まさに芸術こそが全てと一心不乱の演奏をするのでした。本書の主人公について、その人となりをお話する一節である。

ルドルフ・ディットリヒ。ウィーン・コンセルヴァトリウムでアントン・ブルクナーに師事し、若き優秀な音楽家として注目を浴びた。そして近代化政策の直中にあつた明治期の日本へと渡り、お雇い外国人教師として東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)で勤務。日本における西洋音楽の草分け的存在として、幸田延や安藤幸を育

てた他、日本で知った音楽をピアノ用に編曲し、ヨーロッパへ日本音楽の存在を知らしめた……。こうした断片的な情報

忘れられた偉人の足跡を追う

貴重な資料から紡ぎ出される波乱の生涯

小宮 正 安

は、幾つかの資料を仔細に眺めれば、これまでも時折語られてきたものだった。あるいは子孫である、俳優の根上淳にまつわるエピソードとして、

ディットリヒの名前が取りざたされることも時折あった。ただしディットリヒの生涯全体に光を当てるといふ作業は、ほとんどおこなわれてこなかった。本書は現時点でアプロウチできる限りの資料を駆使しながらこの忘れられた偉人の足跡を追った労作である。

それにしても、資料集めは困難を極めたようである。著者に曰く「当時は、彼についての資料の在処がはつきりしなかったりまとまってアークアイブになっているところがなく、資料を採集するために、大木もあるけば樺にあたる道を地をゆく連日が始まったのです。オーストリア・ドイツ、ポーランド、スイス、ギリ、スチエゴ、日本の公文書館、図書館、研究所、大学など諸機関のたぐさの協力を請うことになりました。

そして集められた貴重な資料の一部は、本書にも図版として掲載されている。だが本書は、単なる資料の羅列だけに終わらない。読みやすいです、まず「調」に基づきながら著者が紡ぎ出すディットリヒの波乱万丈の生涯が、裏に分かりやすく

語られているからだ。ハプスブルク家の支配する巨大帝国のいわば「周縁」に生まれ、西洋音楽の「周縁」であった日本において計り知れない功績をもたらした末、ハプスブルク帝国の崩壊と機を仕してこの世を去る中で音楽史の「周縁」に追いやられていった一人の人物の生涯が、確かな恩遣いをもって甦ってくる。

読み手としてはディットリヒが最終的に日本を離れてウィーンへ戻った際、日本に残した心から愛した日本女性と彼女の間に誕生した息子「のこ」のこともより深く知りたくなる。またこうした出来事の背景をなすオリエントリズムの文脈で、彼の行動を突き放して眺める視座も欲しくなる。だがそれはディットリヒの「顕彰を目的とした動きの中で誕生した本書には、ないものねだりの望みかもしれない。出版不況の中、それを克服して実現した一大プロジェクトの実現を、まずは喜ぶたい。こみや・まさやす「横浜国立大学教授・ヨーロッパ文化史・ドイツ文学」
★ひろさわ・ひろこ「ウィーン国立大学精神科



四六判・216頁・2400円
論創社
978-4-8460-1860-3
TEL.03-3264-5254